

『文學論』解説

『文學論』は明治四十年五月大倉書店から出版された。その成立に關しては、漱石自身『文學論』の序の中でも、また『私の個人主義』の中でも、委曲を悉して述べてゐる。ただこの『文學論』の成立が、味の素の發明者として有名な、理學博士池田菊苗の刺激に俟つ所が多かつたといふ事は、この兩所では、觸れられてゐない。従つてこの事は、あまり人人に知られてゐないやうである。然し漱石は、漱石の談話筆記『私の處女作』の中で、かう言つてゐる。——「……然し留學中に段々文學がいやになつた。西洋の詩などのあるものを讀むと全く感じない。それを無理に嬉しがるのは何だかありもしない翅を生やして飛んでゐる人のやうな、金がないのにあるやうな顔をして歩いてゐる人のやうな氣がしてならなかつた。所へ池田菊苗君が獨乙から來て、自分の下宿へ留つた。池田君は理學者だけれども話して見ると偉い哲學者であつたには驚ろいた。大分議論をやつて大分やられた事を今に記憶してゐる。倫敦で池田君に逢つたのは自分には大變

説解

な利益であつた。御蔭で幽霊のやうな文學をやめて、もつと組織立つたどつしりした研究をやらうと思ひ始めた。……」——是が「文學論」成立の端緒に就いて物語つてゐるものである事は、恐らく説明を要しない。

日記によると、池田菊苗がドイツからロンドンの漱石の下宿へやつて來たのは、明治三十四年五月五日の事である。元來池田菊苗は、一ツ橋豫備門以來の、漱石の三四年の先輩であつた。專攻の學科は違つてゐても、顔ぐらゐはお互に知り合つてゐたものに相違ない。然しロンドンで落ち合つて、二人は急に親密になつた。——「夜十二時過迄池田氏ト話ス」——「池田氏ト英文學ノ話ヲナス同氏ハ頗ル多讀ノ人ナリ」——「池田氏ト世界觀ノ話、禪學ノ話杯ス氏ヨリ哲學上ノ話ヲ聞ク」——「夜池田氏ト教育上ノ談話ヲナス又支那文學ニ就テ話ス」——當時の漱石の日記には、さういふのがあるかと思ふと、又「夜池田ト話ス理想美人ノ Descriptionアリ兩人共頗ル精シキ説明ヲナシテ兩人現在ノ妻ト此理想美人ヲ比較スルニ殆ンド比較スベカラザル程遠カレリ大笑ナリ」といふのがあり、その翌日の日記には、「昨夜シキリニ髭ヲ撫ツテ談話セシ爲右ノヒゲノ根本イタク出來物デモ出來タ様ナリ」といふのがある。どういふ理由からか、池田菊苗は、六月二十六日にサウス・ケンシントンの方へ引つ越して行く。然し越して行つても二人は、手紙の遣り取りをし、訪問し合ひ、一緒に散歩し、一緒に食事をした。その池田菊苗が、ロンドンを

立つて歸國の途に就いたのは、同じ年の八月三十日のことである。九月十二日、漱石は寺田寅彦に宛てて、「學問をやるならコスモポリタンのもに限り候英文學なんかは椽原の下の力持日本へ歸つても英吉利に居つてもあたまの上がる瀬は無之候小生の様な一寸生意氣になりたがるもの、見せしめにはよき修業に候君なんかは大に専門原の物理學でしつかりやり給へ本日の新聞で Prof. Rücker の British Association やつた Atomic Theory に関する演説を讀んだ大に面白い僕も何か科學がやり度なつた此手紙がつく時分には君も此演説を讀だらう／ついで此間池田菊苗氏（化學者）が歸國した同氏とは暫く倫敦原で同居して居つた色々話をしたが頗る立派な學者だ化學者として同氏の造詣は僕には分らないが大なる頭の學者であるといふ事は慥かである同氏は僕の友人の中で尊敬すべき人の一人と思ふ君の事をよく話して置たから暇があつたら是非訪問して話しをし給へ君の専門上其他に大に利益がある事と信ずる」と書いてゐる。

漱石が池田菊苗を「大なる頭の學者」として、いかに尊敬し親愛してゐたかは、これらの資料によつて、十分想像する事が出来る。然しこれらの資料だけでは、漱石が池田菊苗の何所からどういふ刺激を受けて、「文學論」の著述を思ひ立つに至つたかは、精確には分からない。ただ漱石は寺田寅彦宛ての書翰の中で、「英文學なんかは椽原の下の力持」だと言つてゐる。「學問をやるならコスモポリタンのもに限」と言つてゐる。「僕も何か科學がやり度なつた」と言つてゐる。

これらの言葉と、池田菊苗がその「コスモポリタン」な「科學」の専攻者であつたといふ事實とを、繋げ合はせて考へて見ると、漱石が池田菊苗から受けた刺激は、その大體の方向に於いて、相當正しく、想像する事が出来はしないかと思ふ。それは、一口に言へば、文藝を科學的に研究する事によつて、その研究を「コスモポリタン」なものにするといふ事である。「幽靈のやうな文學をやめて、もつと組織立つた、どつしりした研究をやらうと思ひ」立つといふ事である。

日本人がいくら英文學に精通したからと言つて、英國の専門家に、頭の上がる瀬はない。その上それが「英」文學で終始する限りは、所詮「地方的」なものの中に踞踏する事であつて、世界人類に共通する問題を究明する事によつて、世界人類が共有する文化財を、いくらかでも豊富にするといふ事ではあり得ない。畢竟するにそれは、「椽の下の力持」である。然しもし人が、英文學・獨文學・佛文學乃至は支那文學・日本文學の「地方的」なものの中に踞踏する事から跳り出て、それらの「地方的」なものとの奥に共通して動いてゐるもの——其所から文藝が流れ出で、それが文藝となつて顯現するものに著眼し、その胚胎と發展と衰退とを跡づけ、其所に支配する法則を發見し——その意味で文藝そのものを研究し、その研究を科學的な基礎の上に置き、後に來る者がその基礎の上に、應分の一石を寄與する事を可能にし得るならば、その人はそれによつて文藝の研究を、「地方的」なものから蟬脱させて、立破に「コスモポリタン」な學問となし得た

筈である。

ドイツの學者は、ナツールギツセンシヤフト自然科學に對してガイスタスギツセンシヤフト精神科學を立て、その精神科學の一部門として、リテラツールギツセンシヤフト文藝科學（もしくはは文藝學）を立てた。漱石が「文學論」に於いて試みようとした事も亦、漱石一流の文藝科學（もしくはは文藝學）の樹立に外ならなかつた。ドイツの學者達は、科學といふ言葉を用ひてゐながら、ともすると形而上學的な、論理的な、主觀的な方法に曲がり込んで無理に全體の辻褄を合はせようとする。然し漱石が「文學論」で試みようとした事は、文藝の純粹な、科學的な、客觀的な、歸納的な、下からの研究である。——勿論是は、漱石がさうしなければならぬ心の状態に到達してゐたから、さうなつたまでで、假令池田菊苗の刺激がなかつたとしても、漱石の内で醗酵してゐたものは、早晚かういふ形をとつて、流れ出たには違ひない。然し正岡子規が漱石の中から「俳句」を引き出したと似たやうな意味で、池田菊苗が漱石の中から「科學」を引き出したといふ事も、亦疑ふ譯に行かないやうである。漱石の「文學論」に於ける池田菊苗の役割は、最も低く見積るとしても、その「觸媒」であつたと言つても、少しも言ひ過ぎではないであらう。

明治三十四年九月二十二日、即ち池田菊苗がロンドンを去つて凡そ一ヶ月の後、夏目鏡に宛てて漱石は、「近頃は文學書は嫌になり候科學上の書物を讀み居候當地にて材料を集め歸朝後一卷

の著書を致す積りなれどおれの事だからあてにはならない」と書いてゐる。同じ年の十一月二十日寺田寅彦に宛てては、「小生不相變碌々別段國家の爲にこれと申す御奉公を出來かねる様で實に申譯がない／今から十年もしたら何か出來想に思ふが此十年が昔からの事だから頗るあてにならない」と書いてゐる。越えて明治三十五年二月十六日には、菅虎雄に宛てて、「漸々留學期もせまり學問も根つからはかどらず頗る不景氣なり歸つて教師なんかするのは厭でたまらない況んや熊本迄歸るに於てをや夫を考へると英國に生涯居る方が氣樂でよろしい近頃は文學書杯は讀まない心理學の本やら進化論の本やらやたらに讀む何か著書をやらうと思ふが僕の手だから御流れになるかも知れません」と書いてゐる。——漱石の計畫は著書實行に移され、既にこの二月十六日の比には、相當はつきりした見當がついて來たものらしい。然もその翌月、明治三十五年三月十五日、漱石が岳父中根重一に宛てた手紙の中には、その「著書」の、ぐつと具體的な計畫が洩らされる。——「私も當地着後（去年八月頃より）より一著述を思ひ立ち目下日夜讀書とノートをとると自己の考を少し宛かくの^原とを商買に致候同じ書を著すなら西洋人の糟粕では詰らない人に見せても一通はづかしからぬ者と存じ勵精致居候然し問題が如何にも大問題故わるくすると流れるかと存候よし首尾よく出來上り候とも二年や三年ではとても成就仕る間敷かと存候出來上らぬ今日わが著書杯事々敷吹聴致候は生れぬ赤子に名前をつけて騒ぐ様なものに候へども序故

一應申上候先づ小生の考にては「世界を如何に觀るべきやと云ふ論より始め夫より人生を如何に解釋すべきやの問題に移り夫より人生の意義目的及び其活力の變化を論じ次に開化の如何なる者なるやを論じ開化を構造する諸原素を解剖し其聯合して發展する方向よりして文藝の開化に及す影響及其何物なるかを論ず」る積りに候斯様に大き〔な〕事故哲學にも歴史にも政治にも心理にも生物學にも進化論にも關係致候故自分ながら其大膽なるにあきれ候事も有之候へども思ひ立候事故行く處迄行く積に候斯様な決心を致候と但欲しきは時と金に御座候日本へ歸りて語學教師杯に追つかはれ候ては思索の暇も讀書のひまも無之かと心配致候時々は金を十萬圓拾つて圖書館を立て其中で著書をする夢を見る杯愚にもつかぬ事に御座候」といふのが、それである。

『文學論』の自序の中で、漱石は當時を回想して、「余は下宿に立て籠りたり。一切の文學書を行李の底に收めたり。文學書を讀んで文學の如何なるものなるかを知らんとするは血を以て血を洗ふが如き手段たるを信じたればなり。余は心理的に文學は如何なる必要あつて、此世に生れ、發達し、頽廢するかを極めんと誓へり。余は社會的に文學は如何なる必要あつて、存在し、隆興し、衰滅するかを究めんと誓へり。」と言ひ、また「余は余の提起せる問題が頗る大にして且つ新しきが故に、何人も一二年の間に解釋し得べき性質のものにあらざるを信じたるを以て、余が使用する一切の時を擧げて、あらゆる方面の材料を蒐集するに力め、余が消費し得る凡ての費用を

割いて参考書を購へり。此一念を起してより六七ヶ月の間は余が生涯のうちにて尤も鋭意に尤も誠實に研究を持続せる時期なり。而も報告書の不充分なる爲め文部省より譴責を受けたるの時期なり。」と言つてゐる。一方漱石は『道草』第五十九で、洋行中の健三の事を描いて、「健三は晝食を節約した憐れな経験さへあつた。ある時の彼は表へ出た歸り掛に途中で買つたサンドキツチを食ひながら、廣い公園の中を目的もなく歩いた。斜めに吹きかける雨を片々の手に持つた傘で防げつゝ、片々の手で薄く切つた肉と麵麩を何度にも頬張るのが非常に苦しかった。彼はいたゞか其處にあるベンチへ腰を卸さうとしては躊躇した。ベンチは雨のために悉く濡れてゐたのである。」だの、「ある時の彼は町で買つて來たビスケットの罐を午になると開いた。さうして湯も水も吞まずに、硬くて脆いものをぼり／＼噛み摧いては、生唾の力で無理に嚙み下した。」だの、「ある時の彼はまた馭者や労働者と一處に如何はしい一膳飯屋で形ばかりの食事を済ました。其處の腰掛の後部は高い屏風のやうに切立つてゐるので、普通の食堂の如く、廣い室を一目に見渡す事は出来なかつたが、自分と一列に竝んでゐるものゝ顔丈は自由に眺められた。それは皆な何時湯に入つたか分らない顔であつた。」だのと言つてゐる。勿論漱石は、「此一念」を起して以來、絶えずかういふ生活をし續けた譯でもなかつたのかも知れない。然し漱石が「此一念」を起して以來は、少くともかういふ覺悟で、自分の口腹の欲は出来るだけ切り詰め、假令生活の上では馭

者や土方の仲間入をしようとも、自分の「消費し得る凡ての費用を割いて参考書を購」ひ、また自分の使用し得る「一切の時を擧げて、あらゆる方面の材料を蒐集するに力め」、鋭意に、誠實に、「此一念」に仕へようとした事だけは、確實である。

然し、この漱石の、自分の肉體を無視して一向きに道に仕へようとする修道者のやうな、ほんとに獻身的な、鋭意な、誠實な研究の持續は、漱石の肉體に影響し、漱石の健康を害はずには措かなかつた。——明治三十五年七月二日、即ち漱石が「此一念」を起してから凡そ一年の後、夏目鏡に宛てた手紙の中で、漱石は「皆々が歸ると自分も歸り度なり候」とは書いてゐるが、然し「日本にてかくの如くの如きのんきにひまがあつて勉強が出来たら少しは人に見せられる著書も出来相なれど歸れば中々追使はるゝ故左様勝手には不參しかたなきものに候」と書き續けてゐる所を見ると、當時の漱石の健康には變化がなく、漱石は現在の「のんきにひま」のある境遇に感謝しつつ、専念自分の仕事に従事してゐた事が分かる。然しそれが九月十二日、同じ夏目鏡に宛てた手紙によると、「近頃は神經衰弱にて氣分勝れず甚だ困り居候然し大したる事は無之候へば御安神可被下候」とあり、更に重ねて「近來何となく氣分鬱陶敷書見も碌々出来ず心外に候生を天地の間に亨けて此一生をなす事もなく送り候様の腦になりはせぬかと自ら疑懼致居候然しわが事は案じるに及ばず御身及び二女を大切に御加養可被成候」とあつて、既にその時漱石は、相當劇しい

神経衰弱に罹つてゐるのである。漱石は此所で、自分の頭が自分の思ふやうに働かない事を、非常に残念に思ひ、自分が今にも「生を天地の間に享けて此一生をなす事もなく送」るやうな、精神上的の癱疾者になるのではないかと心配する。漱石は言葉を繼いで、自分の事は自分で始末するから「案じるに及ば」ない、お前はお前の方を氣をつけると、さりげない事は言つてゐるが、然しこの手紙には、何か漱石の頭の調子の亂れを感じさせるものがあつて、實は漱石は、さういふ怖ろしい未來の可能に對する相當濃厚な危懼を懷いてゐて、萬一の場合の家族の者の心構へを、是で私かに用意して置かうとしたものではないかとさへも想像される。それほど漱石の健康はシリリアスに害はれ、少くとも自分の健康が害はれたといふ、漱石の自覺は可也シリリアスなものであつたのである。漱石がロンドンで、卒然として自轉車の稽古を始めたのも、凡そこの時分の事であつた。勿論さういふ機械的な、然も神経を使ふ運動が、漱石の神経衰弱を緩和する效能を持ち得たかどうかは、疑問である。明治三十六年六月、漱石が歸朝して五ヶ月、『ホトトギス』に發表した『自轉車日記』によると、漱石は明治三十五年の秋忘月忘日、ロンドンで、下宿の婆さんと同宿の日本人との勧めで、自轉車の稽古を始めたといふ事になつてゐるが、それは結局「貴重な留學時間を浪費して下宿の飯を二人前食ひしに過ぎ」なかつたといふのだから、恐らく漱石はそれで自分の健康を回復する事が出来たとは、信じる事が出来なかつたに違ひない。然も漱石

はその明治三十五年の十二月五日にロンドンを出發して、歸國の途に就くのである。

「留學中に余が蒐めたるノートは蠅頭の細字にて五六寸の高さに達したり。余は此のノートを唯一の財産として歸朝したり。歸朝するや否や余は突然講師として東京大學にて英文學を講ずべき依囑を受けたり。余は固よりかゝる目的を以て洋行せるにあらず、又かゝる目的を以て歸朝せるにあらず。大學にて英文學を擔任教授する程の學力あるにあらざる上、余の目的はかねての文學論を大成するに在りしを以て、教授の爲めに自己の宿志を害せらるゝを好まず。依つて一應は之を辭せんと思ひしが、留學中書信にて東京奉職の希望を洩らしたる友人（大塚保治氏）の取計にて、殆んど余の歸朝前に定まりたるが如き有様なるを以て、遂に淺學を顧みず、依託を引き受くる事となれり。」と、漱石は自序の中に書いてゐる。事實漱石は、明治三十四年二月九日、漱石がロンドンに著いて百日たつかたないかの時分に、狩野亨吉・大塚保治・菅虎雄・山川信次郎連名の手紙の中で、「夫からもう一つ狩野君と山川君と菅君に御願ひ申す僕はもう熊本へ歸るのは御免蒙りたい歸つたら第一で使つてくれないかね未來の事は分らないが物が順にはこぶと見て僕も死なず狩野君も校長をして居るとした處で如何ですか御安くまけて置きますよ」と書いてゐるのである。同じ年の六月十九日在ベルリン藤代禎輔宛ての手紙の中にも、「第一高等學校で僕を使つてくれないかと狩野へ手紙を出したが返事が來ない熊本はもう御免蒙りたい」と書いてあ

る。江戸で生れて江戸で育つた漱石が、留學の義務年限を、どうせ高等學校で勤めなければならぬものなら、熊本のやうな田舎でなく、自分の生れ故郷である東京で勤めたいと考へるのは、當然の人情であると言つて可い。然も漱石は此所で、第一高等學校に雇はれたいとは言つてゐるが、大學に這入りたいとは、少しも言つてゐないのである。ただこの手紙を受つた大塚保治から言へば、自分は既に大學にゐる事ではあり、自分の尊敬し親愛する友人が、東京在住を希望し、第一高等學校に雇はれる事を希望してゐる以上、同時に大學にも口を作り、大學で講義が出来るやうに取計らつてやつても、漱石に異存はない筈だと考へるのも、少しも無理ではなかつた。然し漱石から言へば、——特に漱石が「文學論」著述の「一念」を起して以來は、漱石は東京に住んで、第一高等學校で語學の教師をする傍ら、自分の「文學論」を大成したいとは考へても、大學に這入つて英文學を擔任し、英文學に關する講義をしたいなどは、夢にも考へてゐなかつたのである。既に「英文學なんかは椽の下の力持」に過ぎないと觀じてゐる漱石である。さうして「コスモポリタン」な「科學」的な「文學論」を「十年計畫」で完成しようとしてゐる漱石である。大學に這入つて英文學を擔任し、それに必要な準備の爲に貴重な時間を潰す事は、自分が一度抜け出た、狭苦しい審倉の中に、もう一度首を突つ込む、鬱陶しい仕事ではあつても、天空海澗の世界で、世界的に共通な大問題と取つ組み合ふ、働らき榮えのある、男らしい仕事ではなかつた。

當時貧乏してゐた漱石が、自分で何か糊口の途を講じるのでなければ、自分は無論の事、家族の者を養つて行く事が出来ないといふ事を、よく承知してゐたのは、言ふまでもない事である。それだからこそ漱石は、自分では専心自分の「十年計畫」に従事する事を欲してゐたにも拘はらず、「僕も歸つて熊本へは行き度ない可成東京に居りたい然し東京に口があるかないか分らず其上熊本へは義理があるから頗る閉口さ」(明治三十四年九月十二日寺田寅彦宛)といふやうな、心細い事も言つてゐるのである。然し、その事は承知してゐても、自分の仕事に段段熱中して來ると、漱石は、「歸つて教師なんかするのは厭でたまらない況んや熊本迄歸るに於てをや夫を考へると英國に生涯居る方が氣樂でよろしい」とまでも、考へる。或は「著書なんかやらうと思ふと金が欲しくなる教師なんかはいやになる」と言ふ。さうかと思ふと、「日本にてかくの如くのんきにひまがあつて勉強が出来たら少しは人に見せられる著書も出来相なれど歸れば中々追使はる、故左様勝手には不參しかたなきものに候」と諦めて、せめて「のんきにひまがある現在の境遇を、出来るだけ利用しようといふ氣にもなる。さうして漱石はその間に、「十萬圓拾つて圖書館を立て其中で著書をする」といふやうな、憫れな夢を「時々」見たりするのである。然し事實そんな事は、痴人の夢であるに過ぎなかつた。それ故漱石は、せめて自分の時間と勞力とを奪ひ去る

事の最も少ない、語學の教師をして、自分の生計を立て、餘す所の一切の時間と努力とを擧げて、自分の「十年計畫」の中に跳り込まうと決心する。

然し大塚保治に、其所まで漱石の心持の分かつてゐる筈がなかつた。第一大塚保治は、當時漱石がさういふ「十年計畫」を懐いてゐたといふ事さへも、或は知つてゐなかつたかも知れない。よし又知つてゐたとしても、大塚保治は、大學に出てそれを講義しながら、ぼつりぼつりと纏めて行く方針を立てる方が、遙に實際的であるといふ事を理由として、漱石に改めて大學に這入る事を勧めはしても、自分の「十年計畫」が沮害されるといふ事を理由として、大學に這入る事を肯じまいとする漱石の意見に、決して賛成しなかつたに違ひない。漱石も亦、友人の好意に對する感謝とともに、恐らくその事をも考へ併せたものであらう。漱石は竟に大學の講師たる事を受諾して、其所で「十年計畫」の一部分としての「文學論」を講じる事にきめた。然し「不幸にして余の文學論は十年計畫にて企てられたる大事業の上、重に心理學社會學の方面より根本的に文學の活動力を論ずるが主意なれば、學生諸子に向て講ずべき程體を具せず。のみならず文學の講義としては餘りに理路に傾き過ぎて、純文學の區域を離れたるの感あり。余の努力はこゝに於て二途に出でたり。一は纏まらぬものを、既に蒐集せる材料にて、ある程度迄具體的に組織する事なり。二は略系統的に出來上がりたる議論を可成純文學の方面に引き付けて講説する事なり。」

——かうして漱石の『文學論』の講義は、明治三十六年九月の新學年から、始められた。恐らくその準備が、さう急には出來なかつた爲であるに違ひない。明治三十六年四月から六月までの、學年末の一學期間を、漱石は『英文學形式論』（「別冊」所載）の講義で繋いだ。

漱石の『文學論』の講義は、滿二學年、一週三時間づつ續いて、明治三十八年六月に至つて閉ぢられた。明治三十八年九月の新學年から始められたものは、後に『文學評論』の名の下に出版された、『十八世紀英文學』である。

序文にもあるやうに、漱石の「文學論」の根本問題とする所は、「心理的に文學は如何なる必要あつて、此世に生れ、發達し、頽廢するか……社會的に文學は如何なる必要あつて、存在し、隆興し、衰滅するか」を明らかにする點にあつた。然しこの『文學論』では、それよりも、文學を既に與へられたものと見て、それをどうすれば有力に運用する事が出来るかの問題が取り扱はれる。——その爲め漱石は、文學を形成する單位内容から出發した。文學の單位内容とはどういふものであるか。それを分類すれば凡そ幾つの群に纏める事が出来るか。さうしてその分類された群の内、どの群とどの群とが文學の内容としてより有力なものであるか。然もそれらの群は時代の推移とともに増加して行くものであるか、それとも減退して行くものであるか。さういふ事を明らかにした後、漱石は、その文學の單位内容に伴隨する情緒の性質の解剖に進み、更に一般的

に文藝の内容とされるものの特質を明らかにする爲に、科學と文藝、科學者と文藝家、科學上の眞と文藝上の眞とを、比較對照する。次いで文藝的内容の相互關係と、それらのものをどういふ態度でどういふ風に組み合わせれば、最も有力な感動を將來し得るものであるかが問題にされる。最後は集合意識の問題である。集合意識の上に影響する文藝と文藝の上に影響する集合意識との問題は、文藝の社會的方面の研究に屬するが、漱石は此所で、集合意識と文藝家との關係を説き、模擬的意識・能才的意識・天才的意識の差別から、集合意識推移の原則に及び、天才的意識はそれ自身獨特な推移の原則に支配されるから、屢集合意識とその推移を共にする事がなく、従つて天才は多くの場合、時世に容れられない所以を説明する。——一口に言へば、漱石の『文學論』は、文藝に於いて、その内容をなすものはどういふものであるか、それをどう組み合わせせてどう表現すれば、讀者に十分な幻惑を興へる事が出来るか、然も一つの作品が讀者の意識の波のどういふ點に觸れる時、その作品は讀者を最も強く動かし得るのであるか、さうしてその事と眞の天才的な文藝上の仕事とは、どういふ關係に立つものであるか、——さういふ事を、大部分英文學からの例證によつて、客觀的に、科學的に、闡明しようとしたものである。「纏まらぬものを、既に蒐集せる材料にて、ある程度迄具體的に組織する事」と、「略系統的に出來上がりたる議論を可成純文學の方面に引き付けて講説する事」とは、かうして、ほぼ漱石の目的に叶ふものとなつ

たと言つて可い。

然し漱石の「文學論」は元來が「十年計畫にて企てられ」たものであつた。それが急劇に方針を改められ、「纏まらぬものを、既に蒐集せる材料にて、ある程度迄具體的に組織」され、主として「心理學社會學の方面より根本的に文學の活動力を論ずる」事を目的としたものが、それでは「餘りに理路に傾き過ぎて、純文學の區域を離れた」感がある所から、「可成純文學の方面に引き付けて講説」されようとした爲に、漱石の『文學論』が、全體として、渾然たる體裁を備へる事が出来なくなつたのは、已むを得ない。少くともそれが、漱石にとつて、非常に意に滿たないものにしかならなかつたといふ事は、已むを得ない事だつたのである。後年漱石は『私の個人主義』の中で、是を「失敗の亡骸」——然も「畸形兒の亡骸」——或は「立派に建設されないうちに地震で倒された未成市街の廢墟」のやうなものだと批評した。漱石は恐らく、出來さへしたら、是を全部書き直したいとも思つてゐたに違ひない。然し次ぎから次ぎへと漱石に襲ひかかつた創作欲は、漱石の勞力と時間とを、自分の方に奪ひとつて、漱石に『文學論』のやうな「學理的閑文字を弄するの餘裕」を與へなかつた。漱石は、斷えず不満を感じながら、この『文學論』の書き直ほしに著手する事が出来なかつた。

説解

もつとも漱石は、明治四十年四月、東京美術學校で『文藝の哲學的基礎』を講演した。明治四

十一年二月、東京青年會館で『作家の態度』を講演した。更に明治四十四年八月、大阪公會堂で『文藝と道徳』を講演した。これらのものは、恐らく嘗て企てられた漱石の「文學論」の中で、當然取り扱はれべきであつたものが、現在の『文學論』の中では、全然取り扱はれてゐないか、もしくは取り扱はれてゐるとしても、極めて僅かしか觸れられなかつた爲に、截り放して、別別に取り扱はれたものであるやうにも見える。殊に『文藝の哲學的基礎』のやうなものは、「世界を如何に觀るべきやと云ふ論より始め夫より人生を如何に解釋すべきやの問題に移り夫より人生の意義目的及び其活力の變化を論じ次に開化の如何なる者なるやを論じ開化を構造する諸原素を解剖し其聯合して發展する方向よりして文藝の開化に及す影響及其何物なるかを論ず」といふ、嘗て漱石がロンドン留學中、自分の前に置いた問題に、簡單ながらはつきりした解答を與へたもので、漱石の現在の『文學論』の前篇をなすものと、見る事の出来るものである。従つてこれらの講演は、漱石の『文學論』と相互に補充し合つて、漱石の文藝觀を形づくり、ひいては、嘗て漱石が計畫した「文學論」の全體の輪廓を纏め上げる筈のものやうにも想像されるのであるが、然し漱石から言へば、『文學論』だの『文藝の哲學的基礎』だの『作家の態度』だの『文藝と道徳』だの、その他さういふ斷れぎれのものではなく、一往それらのものをすつかり解きほごした上で、それを初一念の「文學論」にまで纏め上げたかつたのに違ひないのである。それだからこ

そ漱石は自分の『文學論』を、「立派に建設されないうちに地震で倒された未成市街の廢墟」のやうなものだと言つてゐるのである。

然し今日の我我から言へば、漱石の『文學論』は漱石の『文學論』として、立派な存在理由を持つてゐると思はれる。歴史的に見ても、假令それまでの内に、イギリスやドイツなどで幾多の「文學論」が出てゐたとしても、是ほどまでに客觀的に、科學的に、文藝を——殊に文藝の力學^{ダイミツクス}を研究しようとしたものは、日本では無論の事、西洋でもその比を見ないと、言つて可いのである。殊に漱石は、人間の意識の流れを、絶えず波形をなして進行するものと考へ、その波を最も單純な一焦點に分割し、それを文藝の單位内容と定め、その單位内容とそれに伴隨する情緒とを $\text{F}=\text{H}$ の公式によつて表現し、この公式を次第に複雑なものにする事によつて、文藝の單位内容の組み合せ方から、文藝の一般内容の連續と變化と推移との跡を、極めて明快に説明して行つてゐる。是は極めて獨創的な方法である。さうして是は、恐らく是から先きの「文學論」が——それが科學的方法、もしくは心理學的方法に立脚するものである限り——必ず一度は是を省みなければならぬと思はれるほど、重要な、基礎的な方法である。然も漱石は、一人の人間の意識が波形をなして流れて行く事を認めるとともに、それが年齢の相違、性の相違、場所の相違、時代の相違の下に、凡ての人間に共通して動いてゐる事を認め、それと文藝とを聯關させ、一人の人間

の意識の流動に關する諸法則は、同時に多くの人間が集合して成り立つ集合意識の流動に關しても十分適用され得る事を説き、それを文學史上の諸現象によつて證明しつつ、其所から集合意識に關する、具體的な諸法則を確立する。是は一見なんでもない仕事のやうに見えるかも知れない。然しそれらのものを確立し得て然も剴切である爲には、其所に精到な觀察と深刻な洞察と高邁な見識とが要求される事は、言ふまでもない。然も漱石の『文學論』に於いて、特に珍重すべき點は、漱石が自分の一切の論議の基礎を、自分自身の心理的事實の解剖の上に据ゑてゐるといふ事である。漱石は此所で、自分が感じ、自分が考へ、自分が信じてゐる事の外は、何事も言つてゐない。漱石にとつて『文學論』の成立が、純粹に自分自身に直接な問題であつたやうに、『文學論』に取り扱はれてゐる一切も亦、漱石自身に直接な問題だつたのである。

ただ漱石はこの『文學論』を、大學で講義しただけで、筆をとつて自分で書かなかつた。是を書いたのは、漱石の自序にもあるやうに、中川芳太郎である。

大倉書店がいつ漱石から、『文學論』出版の許諾を得たものかは、分からない。然し少くともそれが、漱石が文壇的に有名になり、同時に漱石のものなら、小説でなくても、なんでも必ず賣れるといふ見込を、書肆がつけ得た時期であつた事は、明らかである。とすればそれは、『猫』の上巻が出版されて、忽の内に賣り切れたといふ好景氣の後、従つてそれは、早くとも明治三十八年

の十二月、或はその翌年、明治三十九年の初めあたりの事だつたに違ひない。いづれにしてもそれは、漱石の内に創作欲が燃えて、漱石が、所謂「學理的閑文字」を弄んでゐる閑なぞはないと、感じてゐた等の時分である。漱石は、自序の中で「公けにする事を諾したる後も、身邊の事情に束縛せられて、わが舊稿を自身に淨寫する暇さへ見出し得ず。已を得ず、友人中川芳太郎氏に章節の區分目錄の編纂其他一切の整理を委託す。中川氏は此講義のある部分に出席したる上、博洽の學と篤實の質をかねたれば、余の知人中にて、かゝる事を處理するに於て尤も適當の人なり。」と言つてゐるやうに、是を中川芳太郎に託して、淨寫し、區分し、整理せしめた。

然しこの事は——漱石が是を自分で書かずに、他人に書かせたといふ事は、漱石の第一の失敗であつた。勿論この事は、漱石にとつて、已むを得ない事だつたには違ひない。然しその七月にやつと大學を出ようとしてゐる、若い中川芳太郎にとつて、この仕事は、到底背負ひ切れない重荷だつた事は、言ふまでもない事である。漱石は、『十八世紀英文學』（後に『文學評論』と改題）の講義こそ「蠅頭の細字」で原稿を作り、教場ではそれを朗讀するだけの事にしてゐたのだから、是こそほんとに淨寫するだけで事足りたのであるが、然し『文學論』の講義の草稿は、それほど體裁をなさず、従つてその「章節の區分目錄の編纂其他一切の整理」の仕事は、單なる學識のみならず、頭の相當な内面的成熟を必要とするものであつた。中川芳太郎は、それに必要な材料や、

自分のノートや、恐らく他の學生たちのノートを、十分參酌して「一切の整理」に當つたには違ひない。然し、一般的に言つて、どんなに優秀な學生でも、その教師を満足させる、講義筆記を作る事は出来ない。まして文章に神經質な漱石の講義筆記の事である。漱石は中川芳太郎の仕事に不満足であつた。

漱石は明治三十九年十月二十九日の手紙で、自分が「近刊の文學論に自序を認め」たから、「もしそれにてもよろしければ此次の附録に差し上げてよろし」い旨を、當時讀賣新聞の記者をしてゐた、薄井秀一に報じてゐる。是は中川芳太郎の仕事が、十月中もしくは十一月の初めには出來上がる見込がついた爲に、漱石はそれにぎつと眼を通した上で、すぐ印刷にとりかからせる積り——即ち漱石は、まだ中川芳太郎の仕事に眼を通さない前に、この序文を書いたものに違ひないと思はれる。然るに明治三十九年十一月十一日、漱石は高濱虚子に宛てて、「今日は早朝から文學論の原稿を見てゐます中川といふ人に依頼した處先生頗る名文をかくものだから少々降参をして愚癡たらしく讀んでゐます。／今四十枚ばかり見た所……」と書いた。漱石は恐らく、この日初めて中川芳太郎の原稿に眼を通して、是は困つた事になつたものだと、泌泌感じたのである。それでも漱石は、自分の時間と努力とを、この種の「學理的閑文字」の爲に奪ひ去られる事を欲しなかつた爲に、少しは氣に入らない所はあつても、好い加減な所で妥協して、なるべく自分の

加筆を節約しようと心掛けた。殊に漱石は當時、明治四十年の新年號の爲に、『ホトトギス』に小説を書く約束をしてゐたのである。勿論是は後に虚子に頼んで、やつと十二月二十日まで待つてもらふ事にしたが、然し漱石の豫定では、『文學論』の原稿の校閲は、なるべく早く、少くとも十二月の十日以前までには片づけて、あとの十日内外の餘裕で、『ホトトギス』の小説を片づける積りであつたらしい。

然し自分の講義は、假令自分で書いたものでも、また假令自分が當時と同じやうな立場に立つてゐる場合でも、一年以上も経過した上で眺めると、必ず、到る所に補充・改訂の必要を感じ、加筆どころか、全部書き改めてしまひたい氣にさへもなるものである。然も明治三十四・五年乃至明治三十六・七年の漱石と、明治三十八・九年乃至明治四十年の漱石との間には、人生に對する態度の上で、著しい變化があつた。明治三十六・七年までの漱石には、勿論何等かの點で「國家の爲に」「御奉公」したいといふ氣はあつても、寧ろそれは學術的な著述の形で「御奉公」しようといふので、従つてこの『文學論』を纏め上げる事に十分の熱意を持ち、假令一つが自分の生涯の仕事であるとは考へなかつたとしても、是に打ち込み、この爲に骨身を惜まず、寧ろ是を仕上げる事に、自分が貯へ得た一切の時間と努力とを費して、少しも悔いまいとする漱石であつた。然るに明治三十八・九年乃至四十年の漱石は、既に創作の歡びを経験し、理論的な抽象

的な形に於いてではなく、情緒的な具體的な形で、直接に人人の人生の上に働らき掛け、それを自分の使命と信じ、自分は何か創作をしてゐるのでなければ生きてゐる氣がしないとまで感じ出してゐる漱石である。さういふ漱石が、さうでなかつた時分の自分が講じたものを、然もそれを他人が整理したものを、校閲しなければならぬ境遇に置かれるとすれば、漱石がそれに不満を感じ、讀んで行くに従つて、段段筆を加へたい箇所が多くなり、仕舞には、全部書き直ほしてしまひたくなるのは、寧ろ當然の事ではなかつたかと思はれる。是は「一切の整理」の任に當つた中川芳太郎の仕事に對する不満であるよりも、より多く、自分自身の仕事に對する不満である。假令「一切の整理」の任に當つた者が、中川芳太郎ではなく、夏目漱石自身であつたとしても、明治三十八・九年乃至四十年の漱石は、明治三十六・七年の漱石の仕事を書き直ほしてしまひたかつたに違ひないのである。

然し當時の漱石の時間は、驚ろくべく切り詰められてゐた。大學の講義のノートの貯へを切らしてゐた漱石は、一方ではそれを作らなければならなかつた。『ホトトギス』の新年號の爲に、小説の趣向を考へて、それを十二月の二十日までには書かなければならなかつた。高等學校では、學期末の試験をして、その答案の採點をしなければならなかつた。其所へ家主が東京へ歸つて來るに就いて、年内に貸家を探して、今借りてゐる家を明け渡さなければならなかつた。漱石は、

切り詰められた時間の中で、次第に加筆を繁くしつつ、到頭大晦日まで『文學論』の原稿校閲に従事して、年を越える。

然し明治四十年になつても、漱石の校閲はなかなか完了しなかつた。一度手を入れ出すと、かういふ仕事は、きりが無い。漱石は次第に『文學論』の中に打ち込んで行つて、仕舞には第四編第五章の『調和法』以下の四章及び第五編の全部、合計凡そ三百頁の分量を、悉く自分一人で書いてしまふのである。その爲め漱石は、『ホトトギス』に發表した『野分』以後、暫く創作の筆を斷ち、大學と高等學校との授業に必要とする時間以外の、一切の時間を擧げて、この仕事に取つてゐなければならなかつた。

漱石がいつこの仕事を完了したか、精確な所は分からない。然し坂元雪鳥が東京朝日新聞社の使者となつて、漱石招聘の話を持ち込む爲め、漱石の都合を訊いてやつた返事には、「拜啓御手紙拜見實はいつでもよろしと申度なれど只今ある仕事に追はれ其方を一日も早く片づけねばならぬ故日曜の十一時と十二時の間に御出被下候へば好都合に存候」とある。是は明治四十年二月二十二日の事である。その雪鳥が漱石を訪問し來意を告げたあと、暫くたつて、漱石が雪鳥の許へ送つた三月四日の手紙には、「小生今二三週間の後には少々餘裕が出来る見込故其節は場合によりては池邊氏と直接に御目にかゝり御相談を遂げ度と存候。」とある。漱石のこの仕事の完了は、

多分三月の二十四・五日ごろと推定すべきであるらしい。もつともこの手紙が雪鳥の手に渡るや否や、朝日新聞の幹部の間は俄に色めき立つたのださうである。自然社と漱石との間の交渉も頻繁となり、漱石は自分の頭も自分の時間も、可也そつちの方へ奪はれなければならなかつたに違ひない。三月七日には、坂元雪鳥が再び漱石を訪問してゐる。三月十一日には、その事に關して漱石は、再び坂元雪鳥に長い手紙を書いてゐる。三月十五日には、池邊三山が漱石を訪問してゐる。三月十九日には漱石は、池邊三山の招待に應じて、日本俱樂部で晚餐を共にしてゐる。その他、漱石と社の幹部との間に、文獻的に知られてゐない往來が、まだ幾度もあつたのかも知れない。それらの事の爲に、漱石の仕事が豫定通りに進行したかどうかは疑問であるが、然し漱石は三月二十八日の午前八時に東京を立つて、京都に遊びに行つてゐるのである。「文學論」校閲の仕事は、遅くとも三月二十七日には、完了してゐなければならぬ。従つて漱石がこの爲め費した時日は、明治三十九年十一月十一日から明治四十年三月二十七日までとして、凡そ四ヶ月半であつた。——その間に漱石は『野分』を書き、且つ大學と高等學校とで、一週合計二十二時間の授業を擔當してゐた事は、言ふまでもない。

前にも述べたやうに、漱石は初めの内は、大抵な所で我慢する氣で、校閲の筆をとつた。然しそれが段段我慢出來なくなり、直ほしが次第に多くなり漱石は到頭終りの部分を、全部書き直ほ

してしまつた。全部書き直ほされた部分には、まづ問題はない。然しその他の部分——方方書き加へられ、書き直ほされた部分には、文體の上にも敘述の上にも、可也むらがある。是は已むを得ない事である。然しむらは單に、そのみには止まらなかつた。その最も重大なのは、漱石の態度の相違から來る、むらである。

元來この『文學論』は、「學理的」に、客觀的に、科學的に、文藝そのものを研究しようとしたものである。是は繰り返すまでもない。従つて此所では、丁度自然科學者が自然現象を研究の對象としつつ、それを支配する諸法則を發見しようとする場合のやうに、研究の對象は違ふが、好悪と優劣との判断を超越した、無私な、科學者の態度が要求される。然るに、明治三十八年の一月以來、一度創作によつて、自分の判断を——ものの善惡・美醜・正邪・曲直に關する自分の判断を——相手の面上に披瀝して、他人の人生に直接に働らき掛ける味を覺えた漱石は、自分で文藝を創造する事の直接行動ではなく、創造された文藝を研究の對象として、其所から法則を引き出して來るといふやうな、まだるつこい、よそよそしい間接行動には、深い興味を持つ事が出來なくなつてゐるのである。當時の漱石は、假令論文の形で物を書いたとしても、それによつて、人生そのものに對する自分の判断を表現し、他人の人生に直接に働らきかけるのでなければ、意味がないと考へてゐたに違ひない。さういふ考へ方の漱石が、さうまでには考へてゐない時分の、

自分の講義の筆記を校閲するのである。其所にむらが生じるのも、當然である。

勿論漱石の中に、十分科學的精神が動いてゐた事は、争はれない。また、それが動いてゐればこそ漱石も、漱石がロンドンで計畫したやうな、「文學論」著述の大望を懐く事が出来たのである。従つて漱石が『文學論』校閲の筆を執るに際しても、自分自身を、自分が嘗て置いた『文學論』の軌道の上に置いて、其所から自分が逸脱する事を警戒し、出来るだけ「學理的」に、客觀的に、科學的に、敘述の筆を進めようとしたに違ひない事は、十分想像され得る所である。然し一度創作の直接行動に身を委かせ、その歡びを深刻に自分の身上に體驗した者は、決して「學理的」に、客觀的に、科學的に文藝を研究するといふやうな、間接行動の寒帯に住み通す事は出来ない。假令漱石の中に十分科學的精神が動いてゐたとしても、それは、「科學」となつて現はれるよりも、寧ろ文藝家的な、もしくは思想家的な、もしくは志士的な漱石に仕へて、その表現を整理する、整理係りのやうな者として現はれる。かうして漱石は、ともすると、自分が嘗て置いた『文學論』の軌道から逸脱して、自分の好悪と優劣とに關する判断を、隨所に表現しようとするのである。——無論この事は、漱石の『文學論』を、所謂「學理的閑文字」である事から蟬脱して、人人に、ものの善惡・美醜・正邪・曲直をはつきり叩き込むものたらしめる。さうして漱石の『文學論』を、その本來の間接行動たる性質から離して、文藝の直接行動に近いものたらしめる。是は慥に

むらであるが、然しこのむらは、もしそれが許されなかつたとしたら、漱石は或は『文學論』の公刊を肯じなかつたのではないかとさへも思はれるほど、漱石にとつて、重要なむらだつたのである。方法論的に言つて、漱石の『文學論』は、獨創的なものであつたには違ひない。然し學者としてでなく、作家としての明治三十九年・四十年の漱石は、人間として人間に働らきかけるのでなければ、凡ての仕事は意味がないと考へてゐる。従つて漱石は、恐らくそのむらをはつきり意識してゐたにも拘はらず、敢て學者としての過去の自分の軌道を踏み越えて憚らなかつたに違ひない。又そのむらあるが故に『文學論』は、單なる「文學論」ではなく、夏目漱石の刻印を荷つた、特殊な『文學論』になつてゐるのである。

勿論漱石の『文學論』では、英國文學史上に有名な、詩歌・戯曲・小説の類が引例され、それが、日本人としての夏目漱石の立場から、いろいろに解釋され、又いろいろに批評される。文學の專攻者は、是によつて、英國の詩歌・戯曲・小説の獨特な見方を教へられるのは無論の事、假令英文學の專攻者でないまでも、苟も英語の讀める人である限り、是によつて、英國の詩歌・戯曲・小説に關する、自分の眼を開かれて感じるに違ひない。殊に英文學の專攻者は、多少の勞力を費して、適宜に分類・排列を試みるならば、この中から、或はシェクスピア、或はマロリー、或はシェリー、或はウォズワース、其他英國文學史上の諸人物に關する漱石の纏つた意見を知り、

此所に新しい形式としての英國文學史——現在ドイツに於いて屢問題にされてゐる「文學論」リテラチュールゲシヒテとして、アルツリテラチュールゲツセンシヤフトの一體を發見する事も、決して不可能ではないと思はれる。ゲシヒテアルツリテラチュールゲツセンシヤフト（その「文學論」としての「文學史」の、一つの完成した形としては、寧ろ我我は、この『文學論』に次いで、明治三十八年九月から明治四十年三月に互つて、漱石によつて講じられた、『十八世紀英文學』を擧げるべきである。）然しさういふ事よりも何よりも漱石が——明治三十九・四十年の漱石が、先づ表現したかつた事は、文藝とは如何なるものであるか、文藝は如何に見るべきであるか、最後に文藝とは如何なるものであるべきであるか、さういふ事に關する自分の意見であつた。然し『文學論』そのものの構成上、その點に關して漱石は、自分の意見を思ふさま披瀝し悉す事が出来なかつた事は、言ふまでもない。従つて漱石は『文學論』校閲の筆を擱いた直後に於いて、その事を最も單的に取り扱つた、『文藝の哲學的基礎』を、頼まれて講演し、且つ是を、入社辭のやうな意味で、書き直ほして、朝日新聞に掲載するのである。

昭和十一年四月十九日

小宮豊隆

(大森製本)

昭和十一年五月五日印刷
昭和十一年五月十日發行

漱石全集第十一卷

著作權者

夏目純一

編輯及發行

漱石全集刊行會

右代表者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波茂雄

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十一番地
白井赫太郎

印刷所

東京市神田區錦町三丁目十一番地
精興社







